

「弟が交通事故に遭った。」

溝橋 凜

弟が交通事故に遭った。額には大きなコブができ、体はすり傷やあざだらけだった。すぐに刑事さんが来て、救急車の手配をしてくれた。刑事さんは弟に、「心配しなくていいよ。犯人はすぐに見つけるからね。」と声をかけてくれて、弟は少し安心した様子で救急車に乗った。

二週間後刑事さんから、犯人が見つかったと連絡がきた。家族全員で安堵した事を覚えている。この二週間で私は刑事さんを何回も見かけた。事故現場を通りかかる人に話を聞いていた。また、母の話だと、刑事さんは近くの店や施設の防犯カメラを見せてもらうための交渉も大変だったようだ。私達家族は、本当に刑事さんに感謝した。

この弟の交通事故には、様々な人に助けられた。

「今日は救急要請が多くて、署に戻れてないんです。」

と言いながらも優しく接して下さった救急隊員の方、現場検証から、地道な捜査まで行って下さった警察官の方。そこには、「税金」の支えがあった。税金がなければ、消防署も警察署も今のようないかなったかもしれない。こんなに税金に感謝したのは初めてだった。

私が納税をする唯一の方法は買い物で、消費税は中学生の私でも必ず納める義務がある。今考えると恥ずかしい話であるが、以前の私は、消費税を払わされているという気持ちでいた。税金の使い道が理解できていなかった事が、一番の要因だが、消費税の分を少し損したような感覚があったのだ。しかし、調べてみると、国民一人あたり毎月使われている税金がある。警察や消防のために約三千五百円、医療費には約一万四百円、公立中学校生徒には約九万三千円、その他にもゴミ処理費や公共施設費など、私達一人一人の生活を支えていた。

弟の交通事故は、私達家族にとって大変な出来事であったが、私には税金の大切さや必要性を認識する転機が訪れた時となった。今までならば、私一人に対しての税金の使い道を調べようと思う事もなかったし、興味を持つ事もなかった。

また、日本の税金は本当に多様で、自分で関心を持たなければ見えてこない所もあり、税金の使い道のスケルトン化という今後の課題も見えた。

少し前までは、消費税をなんとなく払わされている感覚だったが、今は私のお小遣いで納める事のできる唯一の税金だ。そういう思いで消費税を納めると、有意義に使ってもらいたいと思うようになった。

私達はこれからも税金に支えられ生活していくだろう。私が社会人になれば様々な税金を納める事になる。その時には、税金の使い道に納得をした上で、胸を張って納めよう。